

都留市史

通史編

谷村座の魅力

この谷村町が魅力ある場である中身を紹介していこう。

この魅力の第一に挙げられるのは、谷村座の存在であろう。明治初年にできた谷村座は相変わらず歌舞伎や大衆演劇の上演が見られていた。境の天野恒安家の文書のなかに、谷村座での歌舞伎公演の引き札がある。この引き札には、三月節句にさいして三日間の興行をうつので御来観いただきたいと記されている。

そこで明治四三年の山梨日日新聞に掲載された記事から、その興行の一端を紹介してみよう。

○壮俳菊田一座 四月二三日より

○菊田兼一一行 四月二九日より

〔小柳富代〕、旧派「道中双六」〔寺子屋〕「千代萩」

○覆面演劇一座（東京品川） 七月三〇日より

〔天の巖閉〕

○東京女優 盆中興行、八月三一日より八朔芝居

〔近江源氏〕「清水一角」〔更科岩屋〕

○東京女優優 九月六日

○新派俳優 一二月三日より

〔日蓮記〕「針金強盗刑事審判」

殆どが東京からの一座が多く、題目も旧派・新派の芝居が目立っており、「新旧交々殆ど幕無しにて演」じ、一層の大入りであると伝えている（五月二一日）。隣村の人々を含めていっときの楽しみに芝居でも見ようというのがお盆であり、八朔の祭りのさいだろう。明治四三年のときは、東京女優が乗り込んで引き続いて上演している。また「日蓮記」の上演のさいには舞台にお賽銭が上がったり、題材を石和での強盗が谷村で就縛される顛末を二三幕に仕立てて評判になって、連夜の大入りになったという（一二月五日）。

それにしても、谷村座の観客たちはいつも盛り上がっていた。新聞には「同地の観客は、他に比し喧騒を極むるより、演芸の妨げともなれば矯正したしといふ者あり」（四月二九日）と記されているほどである。谷村座の観客にとって舞台と観客席とが一体となって芝居を楽しむ雰囲気が高まっていたのであろう。

こうした谷村座の興行の仕方は、いつもこんなものだったろう。もちろんこうした芝居興行ばかりではない。谷村座を使つてのさまざまな催し事が見られていた。明治二七年の山梨日日新聞には、谷村座で「陸海万々歳、軍資献金、里芋芝居」と銘うった谷村の青年たちの芝居が大入り満員を続けていると記されている。また明治三一年四月の福音同盟会が谷村座で「聴衆無慮五百有余」を集めて内地雑居問題などにふれた演説会が開催している。あるいは、明治四一年三月には谷村町の有志による薩摩琵琶会が開催されている。そして明治四三年四月には、谷村町の魁連と称する素人の義太夫団体が谷村座で温習会を開き、割れ返るばかりの大入りだと伝えている。明治期の谷村町の魅力といえは、こうした谷村座の存在を抜きにしては考えられないだろう。

谷村町でのさまざまな集会や講演会などは寺院や料亭で開かれることも多かった。明治二七年三月の文墨会は西願寺で、また明治四三年四月には東京相撲の一行が東漸寺の境内にて、同じころ長安寺では書画骨董の展覧会が開催されている。